



Title	日本語の疑問詞疑問文と「の」の有無
Author(s)	金水, 敏
Citation	語文. 2012, 99, p. 45-57
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/70899
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

日本語の疑問詞疑問文と「の」の有無

金 水 敏

1. はじめに

日本語の疑問詞疑問文をめぐって、次のような観察がなされている。

1. 日本語では、否定および疑問の焦点は、原則として否定辞および疑問のマーク「か」の直前の述語に与えられる。それ以外の成分が焦点となる場合は、「の」が必要である。(久野 1983: 127頁等)
2. 一方、疑問詞疑問文では「の」は必須ではない。(同上)
3. 穴埋め式焦点でなく、マルチブル・チョイス式焦点の場合も「の」は必須でない。(同上)
4. 疑問詞疑問文でも「いったい」が付加されると「の」が必要になる。(田窪 2011他)
5. 「なぜ・どうして」による疑問詞疑問文は「の」が必須である。(野田 1995: 215頁)

ただし、5について野田は、一般に「状況の事情を問う」質問文の場合は「の」が必須であり、「なぜ・どうして」は(本質的に)「状況の事情を問う」疑問語だから「の」がいるのだ、という説明をしている。また「警察の訊問のように一方的に質問をする場面では(中略)ノダを用いなくてよい」ともしている(吉田 1994も参照)。

しかし、これらの考察に共通して言えるのは、間接疑問文と直接疑問文の区別がなされていないということである。現代日本語では、間接疑問文と直接疑問文が形態論・統語論的に大きく違っているが、従来の研究ではこの点に着目するものがさほど多くない。本稿でこのことを問題にするのは、間接疑問文の疑問詞疑問文では、そうでない疑問文に比べて「の」のないものが多い、という直感があるからである。

本稿に先立って著者は、金水(2012a)と金水(2012b)を表している。前者では、「なぜ」がマルチブル・チョイス式焦点を持ちにくいから「の」を必要とするという仮説を立てた。しかし、間接疑問文や、「と」による間接話法で導入される疑問文では「の」が起こらない場合があるという観察に基づき、丁寧体の用例や

「だろう」「でしょう」を持つ用例を対象として統計調査を行った。その結果、仮説はほぼ検証されたが、やや例外が残り、それらは反語のニュアンスや歴史的変化によって説明できるのではないかとの見通しを示した。

後者の金水（2012b）では、間接疑問文の「か（どうか）」と直接疑問文の「か」とは機能が異なることを述べた。また、田窪（2011）等で、「いったい」がマルチプル・チョイス式焦点の解釈を消すことによって「の」の使用を必須にさせるという解釈（Pesetsky 1987および田中 2007も参照）について疑問であるとし、「いったい」は文の内容に対する話し手（視点者）の主観的な評価を表す成分であるところから「の」が誘引されるという見方を示した。そして結局、「の」を伴う疑問文は“焦点卓立構文”というべき構文に必須のものであり、疑問詞疑問文は必ずしもこの構文を取る必要がない（潜在疑問文と同様の関数解釈が可能）ので「の」は必須ではないが、「いったい」の働き等により焦点卓立構文となると「の」が必要となるとした。

本稿では、間接疑問文の形態論的・統語論的な性質についてより厳密な規定を行った上で、「の」の分布について統計的な観点から調査を行い、考察を深める。前2稿ではコーパスとして『新潮文庫の100冊』を用い、合わせて作例も用いたが、本稿でもこの方法を踏襲する。『新潮文庫の100冊』に含まれる作品については本稿末尾に一覧を挙げる。

2. 単純 wh 疑問節について

間接疑問文と直接疑問文を分ける形態論的な違いは、「か」が必須かどうかということと、「か」の形態論的な位置である。

間接疑問文の形態論的な特徴は、

- (1) (主題+) 命題〔普通体〕 (+ 否定「ない」) (+ 過去「た」) (+ 「の」) + 疑問の助辞「か」(「だか」または「やら」もこれに準ずるとしておく)
という形式が厳格に守られる点にある。特に疑問の助辞は必須である。また、否定、過去を含むことはできるが、意志・推量の「う・よう」「だろう」は含むことはできない。

間接疑問文を指定する主文の述語は、「知る」「分かる」「教える」「確かめる」「明らかだ」「～による」等、思考・教示・確認・判断・依存等に関わる述語でなければならない。なお、間接疑問文が主文の述語に係る際、無助詞であったり「は」「も」「さえ」「だけ」等、係助詞・副助詞が付いたりするほか、「を」「が」という格助詞によって格関係が明示される場合がある。特に格助詞が付いた間接疑問文を、

「格付き間接疑問文」と呼ぶことにする。格付きか否かによって意味のあるいは機能的な違いがあるかどうかは今のところ不明であるが、後に述べるように、格無しの場合は他の構文と区別が付きにくくなる場合があり、格付き間接疑問文は間接疑問文としての機能が明示的であるということができる。

以上の点を、例文（例作）で示しておく。

(2) パーティに誰が {来る／来た／来ない／来なかった} (の) か {φ／が／は／も／さえ} 分からない。

(3) [田中は誰を愛している (の) か] 分からない。（主題付きの例）

(4) *[誰が来ますか] が分かりません。

(5) *[誰が来る (の) だろうか] が分からない。

(4)は丁寧形、(5)は、推量の「だろう」が入ると非文になることを示している。なお、(4)(5)は格付きの例であるが、格助詞をなくすとよくなるように見える。

(6) 誰がくるだろうか、分からない。

筆者はこれを間接疑問文とは考えず、半自立的な二文連置と考える。このような文型では、丁寧形が使える。

(7) 誰が来ますか、分かりません。

(8) 誰が来るでしょうか、分かりません。

なお、二文連置構文の場合は、後件の述語は直接前件の疑問文を受ける必要はない。例えば次のように、疑問文がまず眼前の事実の背後にある原因について疑問を呈し、後件がその推量を促した眼前の事実を述べる、といった構文がよくある。

(9) 誰が活けたか、きれいな花が玄関に飾られていた。

また二文連置構文の前件が、照応的な成分によって受けられる場合がある。これを、照応型二文連置構文と呼ぼう。

(10) パーティに誰が来るか、それをとても知りたいと思っている。

後件の照応部分を省略したものも二文連置であるが、前件と後件の関係が間接疑問文と同じであると、文全体としては間接疑問文と区別できなくなる。

(11) パーティに誰が来るか、(それを) とても知りたいと思っている、

一方で、格付き間接疑問文の場合は二文連置構文と紛れることがない。

(12) パーティに誰が来るかを (*それを) とても知りたいと思っている。

疑問詞による間接疑問文の唯一の文型である(1)を「単純 wh 疑問節」と呼ぶことにすると、単純 wh 疑問節は間接疑問文に用いられる一方で、二文連置構文にも用いられることが分かった。そしてこの構文は後に述べるように、心内語や地の文、また間接話法構文にも用いられる。

単純 wh 疑問節にとって「か」は必須である。この「か」は疑問詞と呼応して疑問のスコープを決定する（西垣内 1999）。

- (13) a. [誰が来るか] 考えた。
b. [誰が来るか] 分からない。

上の例では、[] で示した部分が疑問のスコープである。

3. 直接疑問文

間接疑問文で唯一許された文型であった単純 wh 疑問節は、直接疑問文では用いることができないとする指摘がある（益岡・田垣 1989；野田 1995）。

- (14) 「明日のパーティには誰が来る {か／の}」

ただし、主節の単純 wh 疑問節は、疑問文としてではなく“反語”表現ならありうるだろう。また、明治時代の書生ことばなど、男性性が強い、單刀直入な表現としてなら用例がある。

- (15) (小) 倉瀬は如何したか (須) した 麓の茶屋に俟ちるまじやらう。(『一読三歎 当世書生気質』当世書生気質

本稿で用いているコーパス『新潮文庫の100冊』では、小説の会話文で単純 wh 疑問節の用例があるが、会話の描写というよりは、内容のみを示した擬似的な会話文と見るべきだろう。

- (16) 「そんなことは断言できないはずだ。私は無罪を信じている。なぜ、そう思うのか」(人民は弱し官吏は強し)

直接疑問文には、間接疑問文に現れない次のような文末のパターンが生じ得る。

- ~ϕ (例: 誰が来る?)
- ~か {ね (え) / な (あ)} (例: 「誰が来るかな」)
- ~かしら (+ね) (例: 誰が来るかしら)
- ~の (+よ) (例: 誰が来るの?)
- ~のだ (+よ) (例: 誰が来るんだ?)
- ~だろう (+ね、 +な) (例: 誰が来るだろう?)
- ~だろうか (+ね) (例: 誰が来るだろうか?)
- ~のだろう (+ね、 +な) (例: 誰が来るんだろう?)
- ~のだろうか (+ね) (例: 誰が来るんだろうか?)
- ~ます (+かしら (ね)) (例: 誰が来ます?)
- ~ますか (+ね、 +な) (例: 誰が来ますか?)
- ~のです (例: 誰が来るんです?)

- ～ですか (+ね) (例: 誰が来るんですか?)
- ～ですかしら (+ね) (例: どなたが来るんですかしら?)
- ～でしょう (+ね、+な) (例: 誰が来るんでしょう?)
- ～でしょうか (+ね) (例: 誰が来るんでしょうか?)

上に示したように、「ね」「な」「よ」「かしら」といった終助詞が付加される場合がある。

単純 wh 疑問節と比較した場合に、直接疑問文には次のような特徴がある。

1. 「か」は必須でない。
2. 丁寧形が可能。
3. 「だろう」「でしょう」が付加されることがある。
4. 終助詞が付加されることがある。

1で「か」は必須でないとしたが、間接疑問文の単純 wh 疑問節で必須の「か」と、「ます」や「だろう」「でしょう」のあとで現れる「か」は、形態論・統語論上同じものではないと見るべきである。仮に、単純 wh 疑問節の「か」を「か₁」、直接疑問文で現れる「か」を「か₂」としておく。

4. 心内語・地の文

小説中の人物の心内における思考を文章でたどるような文脈では、心中の疑問が単純 wh 疑問節で書かれことがある。また小説の地の文などでは、だれの疑問ということではなくとも、文脈によって疑問を仮構する場合があり、その際に単純 wh 疑問節が用いられることがある。ただしこのような用法の中で単純 wh 疑問節以外の文型が用いられることがある。

- (17) それにしても夢はなぜ七瀬に、まだ七瀬が見てもいい、現実に存在する風景を見せたのか。(エディップスの恋人)
- (18) なぜあたしはこんな善行を働く気になったのか、たぶん、あたしの過敏な想像力がそれにがまんできなかったからでしょう。(聖少女)
- (19) コルフ島にいるはずのトレヴィザンが、なぜ今頃、それも秘かに本国に帰っているのだろう。(コンスタンティノーブルの陥落)

5. 間接話法構文

日本語の引用形式は、英語のように語法的に間接話法と直接話法が区別される訳ではないが、その区別はあると思われる。間接話法では、単純 wh 疑問節を用いることができる。

(20) 「パーティに誰が来たか」と田中に聞いた。

直接話法としてこの文を捉えると、実際に「パーティに誰が来たか」と発話されたことになるが、既に見たように主節の疑問文として単純 wh 疑問節を用いることはできないので、その解釈はとりにくいくことになる。話法の内部は、発話の内容を要約したものであって、発話の形式までをなぞったものではない。これを間接話法と見ておく。

本論の趣旨からやや外れるが、疑問詞疑問文との関連で日本語に間接話法が存在すると仮定することの有効性を示すことができる。間接話法では話法内の疑問詞が、引用の助詞「と」を飛び越えて話法の外の疑問文と呼応することができるが、直接話法ではそれができない。まず呼応する例を示す。

(21) 「パーティに誰が来た」と考えたか教えてください。

この例では、「誰が」と「考えたか」が呼応して疑問のスコープを作っている。

(23)に対する応答は、例えば「田中です（=田中が来たと考えました）」のように、「誰」に当てはまる回答を与えることになる。一方で、

(22) 「パーティに誰が来ただろう」と考えたか?*（どうか）教えてください。

のような例では、「誰が」と「考えたか」の呼応が「だろう」によって妨げられるので、直接話法の解釈しかできず、応答としては「（パーティに誰が来ただろうと）考えました」のように、肯定疑問文に対する回答にならざるをえない。「（どうか）」を挿入したのは、「考えたか」が肯定疑問文の解釈を余儀なくされるため、「どうか」を入れた方が解釈が楽になるからである。同様に、

(23) 「パーティに誰が来ました」と考えたか?*（どうか）教えてください。

でも「誰」は「考えたか」と呼応することができない。このように、間接話法は「だろう」や丁寧体を含むことができない点で、間接疑問文（または単純 wh 疑問節）と共通点がある。ただし間接疑問文とちがって疑問詞を含む間接話法には「の」は入れられないようである。

(24) a. 「パーティに誰が来たの」と考えたか?*（どうか）教えてください。

b. 「パーティに誰が来たんだ」と考えたか?*（どうか）教えてください。

上の例では、「誰が」と「考えたか」の呼応は結べない。これは間接疑問文の「のか」と違って、「の」あるいは「のだ（んだ）」と「と」の間に形態論的な一体性がなく、直接疑問文の解釈が余儀なくされてしまうためと考えられる。

6. ここまでまとめ

間接疑問文に唯一用いられる疑問詞疑問文の文型を単純 wh 疑問節と呼ぶ。単

純 wh 疑問節は、節末に「か」が必須であり、普通体のみで丁寧体はとらず、「だろう」「でしょう」も付加できない。単純 wh 疑問節は間接疑問文のほか、間接話法の引用文、二文連置構文、心内文等に用いられるが、直接話法の質問文（特に音声言語）としては用いることができない。

「の」の有無について見る場合、間接疑問文というよりは、この単純 wh 疑問節という構文を指標として調査するのがよいと思われる。

7. 調査

調査対象のコーパスとして『新潮文庫の100冊』から日本人作家の作品を選んだ。ここから、「なぜ」「どうして」を含んで述語を持つ疑問文を抽出し、684例を得た（以下、単に「なぜ」の例とする）。これと対比するために、「だれ」「どなた」に「が」または「を」の付いた疑問文を抽出し、さらに反語と見られる101例を除いて、172例を得た（以下、「だれ」の例とする）。

「誰」、「なぜ」それぞれについて、単純 wh 疑問節とその他の疑問文を分け、「の」を持つものと持たないものに分けた。さらに単純 wh 疑問節については、間接疑問文、「と」による間接話法、それ以外の内訳も示した。表1および表2として分布を示す。

表1 「だれ」

	単純 wh 疑問節			その他
の	38			76
	間接	話法	それ以外	
	18		16	
の無し	45			13
	間接	話法	それ以外	
	25		8	

表2 「なぜ」

	単純 wh 疑問節			その他
の	258			309
	間接	話法	それ以外	
	72		133	
の無し	88			29
	間接	話法	それ以外	
	31		24	

「だれ」と「なぜ」を比べた場合、「なぜ」の疑問文が「の」を持つ比率が高い（「だれ」では「の」を持たない疑問文が約34%であるのに対し、「なぜ」では17%）。それでも、「なぜ」に17%の「の」を持たない疑問文があるということは、「なぜ」の疑問文は必ず「の」を持つとする仮説は成り立たないことが分かる。

その内でも、「だれ」「なぜ」とともに、単純 wh 疑問節に「の」のない疑問文が多く分布している。「だれ」の場合は、単純 wh 疑問節では「の」のない疑問文が「の」を持つものを上回っている。「なぜ」の場合は「だれ」ほどではないが、それでも、単純 wh 疑問節のうちの25%を「の」のないものが占めている（「だれ」では54%）。

それぞれ、用例を示しておこう。まず、「だれ」の場合。

● 単純 wh 疑問節：「の」あり

- (25) 私は台所の椅子に腰を下ろしていittai 誰が私のごみためのような部屋をかたづけてくれたのか思いをめぐらせてみた。（世界の終わりとハードボイルドワンドーランド）

● 単純 wh 疑問節：「の」なし

- (26) 町には昔から一つの組合があり、それで互に助け合った。 誰がそういうものを作ったか今は知らぬ人の方が多かった。（志賀直哉「雨蛙」）

● その他：「の」あり

- (27) 初めのうち重松は、 いittai 誰がそんな流言を放ったのだろうと、その元兎を探り出してやろうと思っていた。（黒い雨）

● その他：「の」なし

- (28) 「そうだなあ。その頃のことは、 誰が知っているかなあ」（エディップスの恋人）
次に「なぜ」の場合を見ていく。

● 単純 wh 疑問節：「の」あり

- (29) 俺はきょう、もう一度「モーツアルト」に寄って、主人と話をしてきた。 娘がなぜ夫と離婚したのかを包み隠さず話して聞かせた。（錦秋）

● 単純 wh 疑問節：「の」なし

- (30) 金子はそう答えたが、一応エディにも説明しておいた方がいいと判断したらしく、 なぜその額になったかを話しあげた。（一瞬の夏）

● その他：「の」あり

- (31) 「ええ額に。でも一度だけ唇で唇におさわりになったわ。 なぜそんなことをなさったの？」（砂の女）

● その他：「の」なし

(32) 「なぜあたしを起きなかつた？」(痴人の愛)

最後のグループには、(32)のような詰問調の用例が目立つ。野田（1995）が言う、「警察の訊問のように一方的に質問をする場面では（中略）ノダを用いなくてよい」という説明に合致する。一方で、このグループには、次の例のように現代日本共通語の例としてはやや奇異な印象を与える用例も含まれる。

(33) 「ほんとうにねい。おいら、お酒をなぜあんなにのんだろうなあ。」(カイロ団長)

(34) 「この家にはいま未紀だけ？」とぼくはきいた。

「あなたとあたし、ばあやとその甥の高校生、若いお手伝いさん、それからあちらの離れには廃人がひとり」

「廃人ってだれのこと？」

「父です。去年の冬、脳溢血で倒れたんですって。ものもいえないとねたきりの瘋癲老人。かわいそうなひと」

「なぜかわいそうですか？」

「なぜだかかわいそうですわ」未紀は首をかしげてそういいながら窓のカーテンを左右にひいた。(聖少女)

(33)は「のんだろうなあ」ではなく「のんだんだろうなあ」とありたいところだが、「ねい」「おいら」等の要素から、この話者が非標準的な日本語を話すことが示されており、その文脈で理解すればよいのだろう。また(34)も「なぜかわいそうなのですか？」が期待され、このままでは外国人の片言のように聞こえるが、しかし直前に「かわいそうなひと」とあり、それを受けて「なぜ「かわいそう」ですか」と引用箇所を名詞的に表したと見れば、やや不自然さは薄れる。

次に、「いったい」が及ぼす効果と、単純 wh 疑問節の関係について見ておく。

表3 「だれ」と「いったい」

	単純 wh 疑問節		その他	
	38		76	
の	いったい	それ以外	いったい	それ以外
	6	32	9	67
の無し	45		13	
	いったい	それ以外	いったい	それ以外
	1	44	0	13

表4 「なぜ」と「いったい」

		単純 wh 疑問節		その他	
の	258			309	
	いったい	それ以外	いったい	それ以外	
	6	252	5	304	
の無し	88			29	
	いったい	それ以外	いったい	それ以外	
	2	86	0	29	

田窪（2001）等によれば、「いったい」を含む疑問詞疑問文は「の」を必要とするが、単純 wh 疑問節は「の」が少なくなる傾向がある。どちらの効力が強いかということを見ると、「だれ」も「なぜ」も、単純 wh 疑問節では「いったい」を含みながら「の」を持たない例が見られる。以下にその用例を示す。

- (35) 「この人はな、コミッショナーの人だから、訊いてみろよ。いったい誰がほんとのマネージャーか、ええ、訊いてみろっていうんだよ」（一瞬の夏）
- (36) 加藤を弁護する外山三郎の口のあたりを眺めながら、加藤は、いったい、なぜこんなことになったかをもう一度考えようとした。（孤高の人）
- (37) ここにペンを擱いたのは右の思い上りのせいではなく、ちょうど隣の部屋のあたりにかたりと物音がしたからで、それとても箸が倒れたぐらいのことに過ぎないのに、いったいそんなことになぜ愕然と胆をひやすかといえば、つまりこの日ごろわたしある男につけ狙われて絶えず生命をおびやかされているためにはかならぬ。（吉行淳之介「葦手」）

このように、単純 wh 疑問節は「いったい」の効果を和らげる効果があることがわかる。一方、単純 wh 疑問節でない疑問詞疑問文では、「だれ」「なぜ」とともに「いったい」があると、必ず「の」が伴われている。

8. 考察

ここでは、金水（2012b）で示された、「焦点卓立構文」という概念に基づいて、本稿で行った調査結果を整理したい。

文中の成分で焦点として提示したいものがある場合には、焦点卓立構文によって焦点のスコープを明示しなければならない。それは基本的に述語に付加される「の」によって行われる。野田（1997）で言う「スコープの「の（だ）」がほぼこれに当たる。肯定平叙文では、文中の要素がすべて肯定命題に包摂されるので焦点卓立構文にする必要はない⁽³⁸⁾が、否定⁽³⁹⁾や疑問⁽⁴⁰⁾の文脈では述語以外の成分に焦点が

置かれる場合は焦点卓立構文にしなければならない。

(38) 田中さんは1956年に生まれた。

(39) a. *田中さんは1956年に生まれなかつた。

b. [田中さんは1956年に生まれた] のではない。

(40) a. *田中さんは1956年に生まれましたか？

b. [田中さんは1956年に生まれた] のですか？

一方、疑問詞疑問文は、疑問詞は焦点であることには違いがないが、むしろそれ故に焦点卓立構文を必ずしも要しない。単純 wh 疑問節であれば、疑問詞と「か₁」によって疑問のスコープが明示される。それ以外の疑問文であれば、疑問文と文末音調、「だろう」、「か₂」等の文末マーカーによって同様に疑問のスコープが決定する。しかもしも、それに加えて何らかの動機付けがあれば、疑問詞疑問文でも焦点卓立構文が発動される。それは、疑問詞の指示対象について文脈と結びつけながら主観的に思いを巡らす、といった文脈であろう。単純 wh 疑問節に「の」が少なくなるのは、それが客観的な“関数”として扱われている場合が多いからである。「いったい」が付加されると「の」が多くなるのは、「いったい」が主観的に背後の事情について思いを巡らせていることの標識だからである。「なぜ」に「の」が多いのは、「なぜ」が基本的に文脈と当該命題を結びつけ、背後の事情について思いを巡らす際に用いられることが多いからである。それでも単純 wh 疑問節の中では「なぜ」は「の」を伴うことが減るし、また単純 wh 疑問節以外の文でも、眼前的の状況に対して相手に詰問するなどの文脈では「の」は表れない。

9. さいごに

本稿では、疑問詞疑問文と「の」の関係を探る際に、間接疑問文に唯一許された文型「単純 wh 疑問節」の導入が有効であることを示した。

本稿が扱ったコーパスはさほど大きくないので、今後、さらに大きなデータに基づいて、本稿が提示した仮説を検証していく必要があるだろう。しかもしも本稿が示した道筋が正しい方向にあるとすれば、その射程は古代語、特に係り結び構文に及ぶ。係り結び構文のうち、とくに「ぞ」「か」によるものは本項で言う焦点卓立構文と見なすことができる（金水 2011）。また、本稿の観察は Takubo (1983; 1985)、田窪 (2001)、Pesetsky (1987)、棄原 (2010) 等の統語論的研究に対する批判と貢献を含むものである。これらの諸点については稿を改めて論じる必要がある。今後の課題としたい。

参考文献

- 金水 敏 (2011) 「第三章 統語論」 金水敏・高山善行・衣畠智秀・岡崎友子 (著) 『文法史』 シリーズ日本語史、3、77~166頁、岩波書店。
- 金水 敏 (2012a) 「理由の疑問詞疑問文とスコープ表示について」 近代語学会 (編) 『近代語研究』 第16集、pp. 349~367、武藏野書院。
- 金水 敏 (2012b) 「疑問文のスコープと助詞「か」「の」」 東京大学国語国文学会 (編) 『国語と国文学』 89-11 : 76~89。
- Kuno, Susumu (1980) "The scope of the question and negation in some verb-final languages," *Chikago Linguistic Society* 16 : 155~169.
- Kuno, Susumu (1982) "The focus of the question and the focus of the answer," *CLS* 16 : 134~157.
- 久野 嘉 (1983) 『新日本文法研究』 大修館書店。
- 桑原和生 (2010) 「日本語疑問文における補文標識の選択と CP 領域の構造」 長谷川信子 (編) 『統語論の新展開と日本語研究』 pp. 95~127、開拓社。
- Takubo, Yukinori (1983) "On the scope of the question and the negation," *Papers from Kyoto Workshop on Japanese Syntax and Semantics*, pp. 48~69. The Kyoto Circle for Japanese Linguistics.
- Takubo, Yukinori (1985) "On the scope of negation and question in Japanese," *Papers in Japanese Linguistics* 10 : 87~115.
- 田窪行則 (2011) 『日本語の構造—推論と知識管理—』 くろしお出版。
- 田中大輝 (2007) 「日本語の wh 疑問文の構造と解釈の問題について—「演算子」としての wh 句と「変項」としての wh 句—」 九州大学大学院人文科学研究院言語学研究室 (編) 『九州大学言語学論集』 28 : 93~105.
- 西垣内泰介 (1999) 『論理構造と文法理論—日英語の WH 現象—』 くろしお出版。
- 野田春美 (1995) 「～ノカ？、～ノ？、～カ？、～φ？」 宮島達夫・仁田義雄 (編) 『日本語類義表現の文法（上）単文編』 くろしお出版。
- 野田春美 (1997) 『「の（だ）」の機能』 くろしお出版。
- Pesetsky, David (1987) "Wh-in-situ: Movement and unselective binding," Reuland, E. and ter Meulen, A. (eds.) *The Representation of (In) definiteness*, pp. 98~129, Mass: Cambridge.
- 益岡隆志・田窪行則 (1989) 『基礎日本語文法』 くろしお出版。
- 益岡隆志・田窪行則 (1992) 『基礎日本語文法—改訂版—』 くろしお出版。
- 吉田茂晃 (1994) 「疑問文の諸類型とその実現形式—ノデスカ／マスカ型疑問文の用法をめぐって—」 『島大国文』 22 : 1~13、島根大学。

資料

CD-ROM 版『新潮文庫の100冊』 新潮社

日本人の作者による作品に限定する。扱った作品は以下の通り。

- 森鷗外「カズイスチカ」「興津弥五右衛門の遺書」「護持院原の敵討」「高瀬舟」「高瀬舟縁起」「最後の一匁」「山椒大夫」「二人の友」「杯」「百物語」「普請中」「妄想」
- 伊藤左千夫「守の家」「浜菊」「姫子」「野菊の墓」■夏目漱石「こころ」■島崎藤村「破戒」■泉鏡花「歌行燈」「高野聖」「国貞ゑがく」「女客」「壳色鴨南蛮」■有島

武郎「小さき者へ」「生れ出づる悩み」■志賀直哉「雨蛙」「好人物の夫婦」「濠端の住まい」「佐々木の場合」「山科の記憶」「十一月三日午後の事」「小僧の神様」「城の崎にて」「真鶴」「赤西蠣太」「冬の日」「痴情」「転生」「冬の往来」「晩秋」「焚火」「流行感冒」「瑣事」■武者小路実篤「友情」■谷崎潤一郎「痴人の愛」■山本有三「路傍の石」「路傍の石・あとがき」「路傍の石・ペンを折る」「路傍の石・付録」■芥川龍之介「芋粥」「運」「袈裟と盛遠」「好色」「邪宗門」「俊寛」「鼻」「羅生門」■宮沢賢治「オツベルと象」「カイロ団長」「シグナルとシグナレス」「セロ弾きのゴーシュ」「ビジテリアン大祭」「ひのきとひなげし」「マリザロンと少女」「よだかの星」「黄いろのトマト」「銀河鉄道の夜」「双子の星」「猫の事務所」「北守将軍と三人兄弟の医者」「饑餓陣營」■三木清「人生論ノート」「人生論ノート・後記」■井伏鱒二「黒い雨」■川端康成「雪国」■石川淳「かよい小町」「マルスの歌」「葦手」「喜寿童女」「山桜」「処女懷胎」「焼け跡のイエス」「張柏端」■壺井栄「二十四の瞳」■梶井基次郎「Kの昇天」「ある崖上の感情」「ある心の風景」「のんきな患者」「愛撫」「闇の絵巻」「過古」「器楽的幻覚」「後尾」「桜の樹の下には」「城のある町にて」「雪後」「蒼穹」「泥濘」「冬の日」「冬の蟬」「橡の花」「路上」「檸檬」「覓の話」■小林秀雄「モオツァルト」「偶像崇拜」「光悦と宗達」「骨董」「実朝」「真賤」「西行」「雪舟」「蘇我馬子の墓」「鉄斎」「徒然草」「当麻」「平家物語」「無情といふ事」■竹山道雄「ビルマの豊饒」■林芙蓉子「放浪」■山本周五郎「さぶ」■堀辰雄「風立ちぬ」「美しい村」■石川達三「青春の蹉跎」■井上靖「あすなろ物語」■中島敦「李陵」「山月記」「弟子」「名人伝」■太宰治「人間失格」■大岡昇平「野火」■松本清張「点と線」■新田次郎「孤高の人」■福永武彦「草の花」■水上勉「雁の寺」「越前竹人形」■阿川弘之「山本五十六」■三浦綾子「塩狩峠」■遠藤周作「沈黙」■池波正太郎「剣客商売」■安部公房「砂の女」■吉行淳之介「砂の上の植物群」「樹々は緑か」■三島由紀夫「金閣寺」■星新一「人民は弱し官吏は強し」■立原正秋「冬の旅」■北杜夫「楡家の人々」■吉村昭「戦艦武藏」■開高健「パニック」「巨人と玩具」「裸の王様」「流亡記」■野坂昭如「アメリカひじき」「プアボーイ」「ラ・クンパルシータ」「火垂るの墓」「死児を育てる」「焼土層」■三浦哲郎「忍ぶ川」■有吉佐和子「華岡青洲の妻」■曾野綾子「太郎物語」■五木寛之「風に吹かれて」■渡辺淳一「花埋み」■井上ひさし「ブンとフン」■筒井康隆「エディップスの恋人」■大江健三郎「死者の奢り」「飼育」「人間の羊」「戦いの今日」「他人の足」「不意の啞」■倉橋裕美子「聖少女」■塩野七生「コンスタンティノープルの陥落」■藤原正彦「若き數学者のアメリカ」■椎名誠「新橋島森口青春篇」■沢木耕太郎「一瞬の夏」■宮本輝「錦秋」■赤川次郎「女社長に乾杯！」■高野悦子「二十歳の原点」■村上春樹「世界の終わりとハードボイルドワーランド」

(きんすい・さとし 本学大学院教授)